

特 00

382

義經一代記

卷八

石鼎烹
茶泉味
甘



義経遺跡の身成以玉能狩狼の噬越域の毒免く
 頼朝勅興の目木友で首とて平氏を討ち彼比族を西
 海に織す感疾風の草葉茂拂ふ如く何ぞ其豪遇ある
 頼朝雄囚と雖も義経無うしせ六立とて乃に驕暴の平
 氏成誅鋤し速に霸業成創ト久巳の意を海内ノ敷く
 得ん乎其功至て大なるや云ふ一然らに一朝護者お沮
 手も終み其身を亡はせ哀哉間義経記を讀み其事跡
 能く本もいふ感業興起せむる者多し故に今其要を
 攬りて童蒙示んと固く大人君子不供はる非は諸
 彦宜しく此書の陋卑を恕せよ



牛若丸十才ふし鞍馬山
に登り雪の初と積こ
年十才諸家の系譜を
見よ吾祖先を知り夫
より志と決して大義を
ひ立ち夜々山上入りて
刀術を試み師あぐりて
能くその道奥を究む

喜三太



牛若丸

牛若丸大志を抱いて鞍馬
 の坊と出で金賣吉次等
 の一随従して陸奥へ下向
 する途中旅泊三強盗あり
 りて己の荷物を奪
 さんんとし時よ牛若丸
 その賊長熊皮と斬つ
 残賊と捕えしとを



熊皮



牛若丸

四
 金
 五
 六
 七
 八
 九
 十

牛若丸大義と起さん
 ことを欲し先味方と
 集めんと東下る道を
 ぐ尾張國熱田の大宮
 司よりて冠を加九郎
 義経と号け下然より
 上毛行伊勢人義盛を
 者得君臣の約と為せ



義盛



牛若丸



源義經

九郎義經陸奥下向し
 秀衡は依りんとて當
 時秀衡は鎮守府將軍
 たり義經往て見へん
 偶もりの金を乞ふて
 以て吉次は報を與
 ふありき
 凡そ七年



秀衡

牛若軍騎女粧をして
 笛と鳴らして五條の橋上
 と行く弁慶其女粧と
 怪に薙刀を以て懐も半
 若得ると渡り合誓し
 戦ひ其進退の凡る
 ちきり弁慶竟に降参
 後無忠臣の名を顕は

牛若丸



弁慶

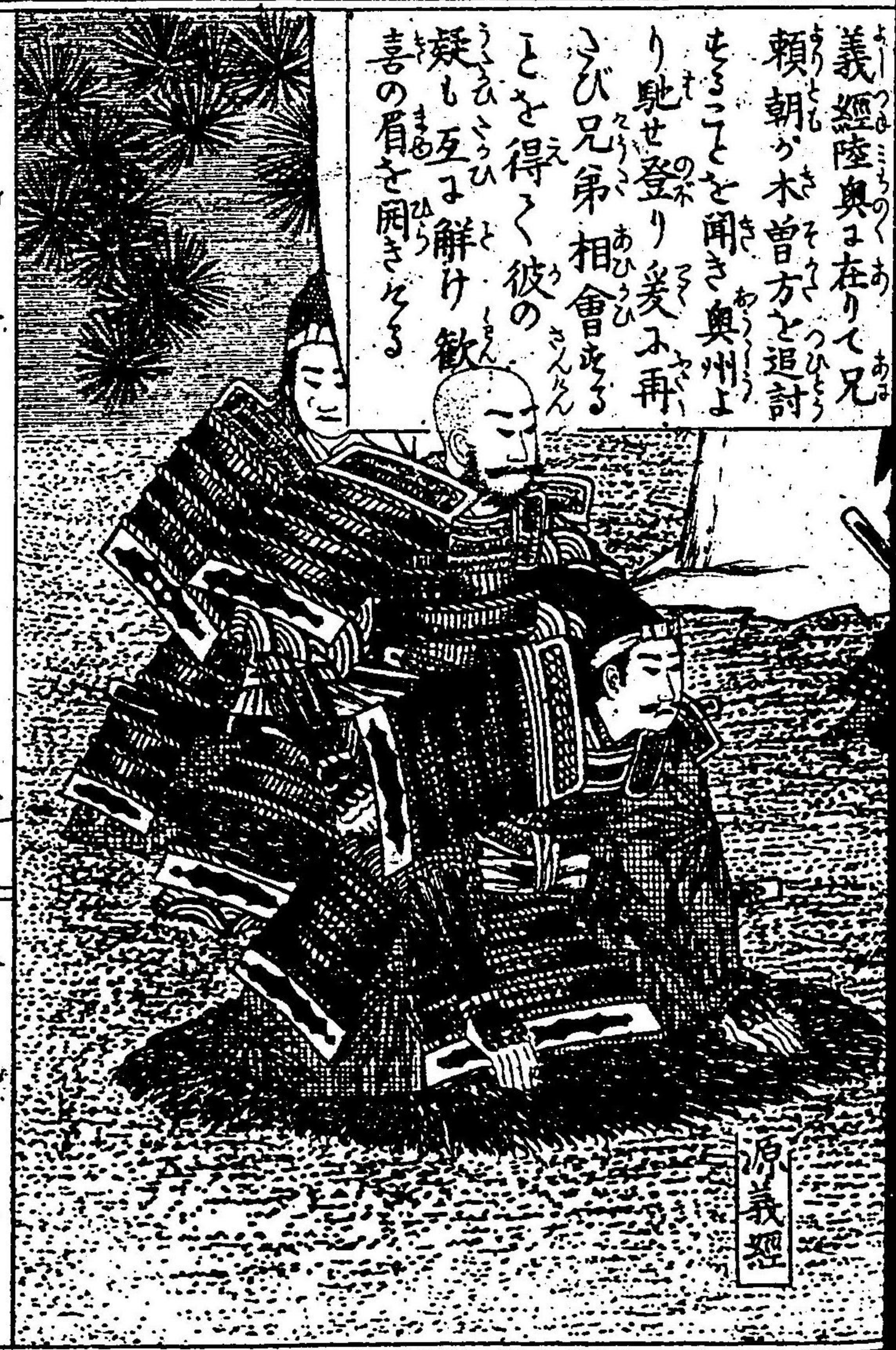


木曾退討の命を蒙り頼
 朝兄弟大軍を以て攻
 登り宇治瀬田の對岸
 中木曾方より水鳥の
 數多むれり羽音と
 聞て夜撃の奇來り
 と思ひ肩章して大
 敗ととりしことを





義經陸奥に在りて兄
 頼朝が木曾方と追討
 せしことを聞き奥州よ
 り馳せ登り爰に再
 りび兄弟相會せり
 ことを得く彼の
 疑も互に解け歡
 喜の肩を肩きたり



義經

九

八
七
六
五

源義經

源義朝

義經

源義經



平軍襲撃の評定は
義經逆櫓を用ひんと
云ふを佞臣梶原遮り
とこれと止め古例
を引く其論を破ら
んとす義經きつと
竟に逆櫓を用ひて
大勝を得たり

梶原



+

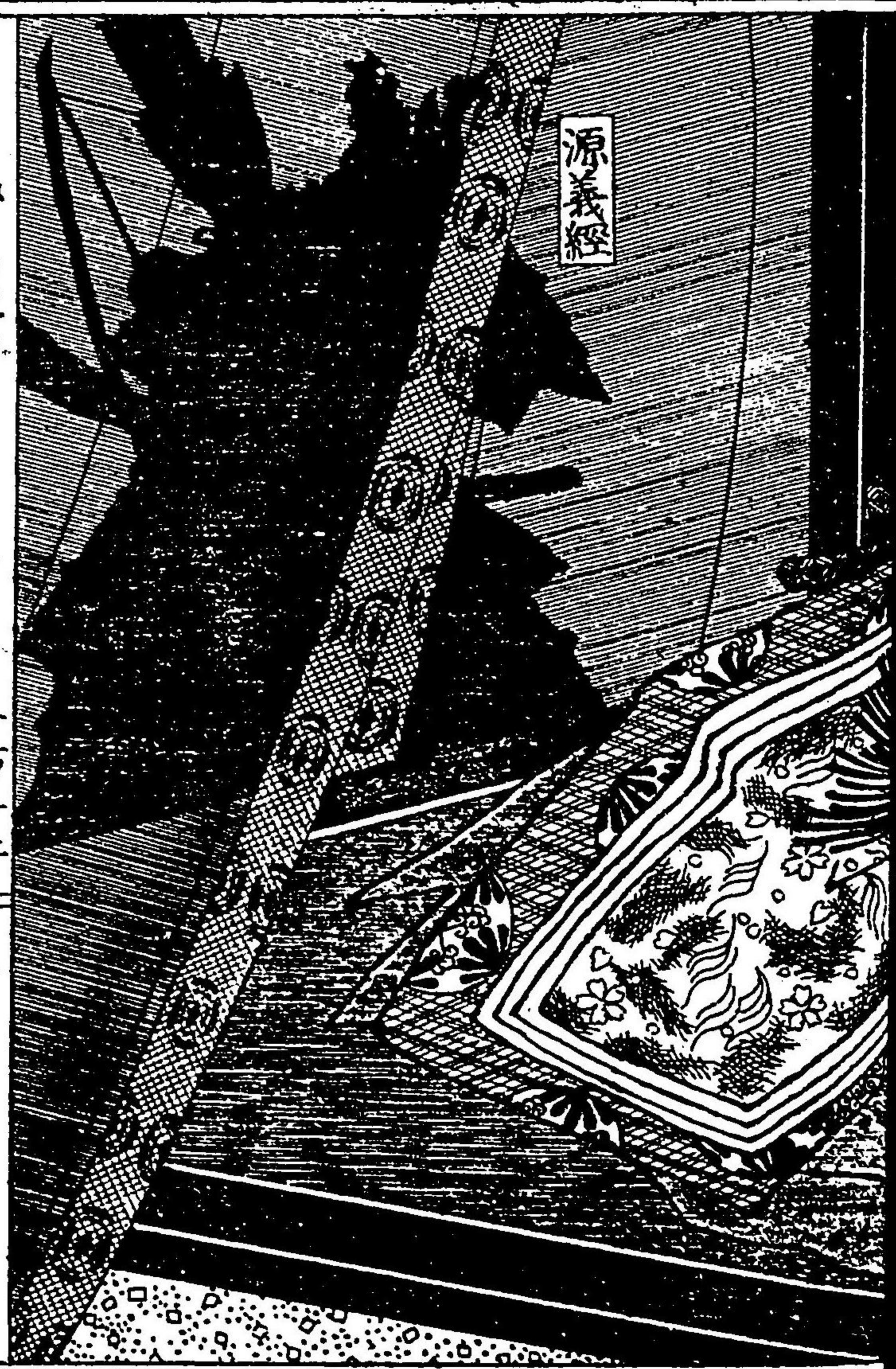
五

義經

五

源義經

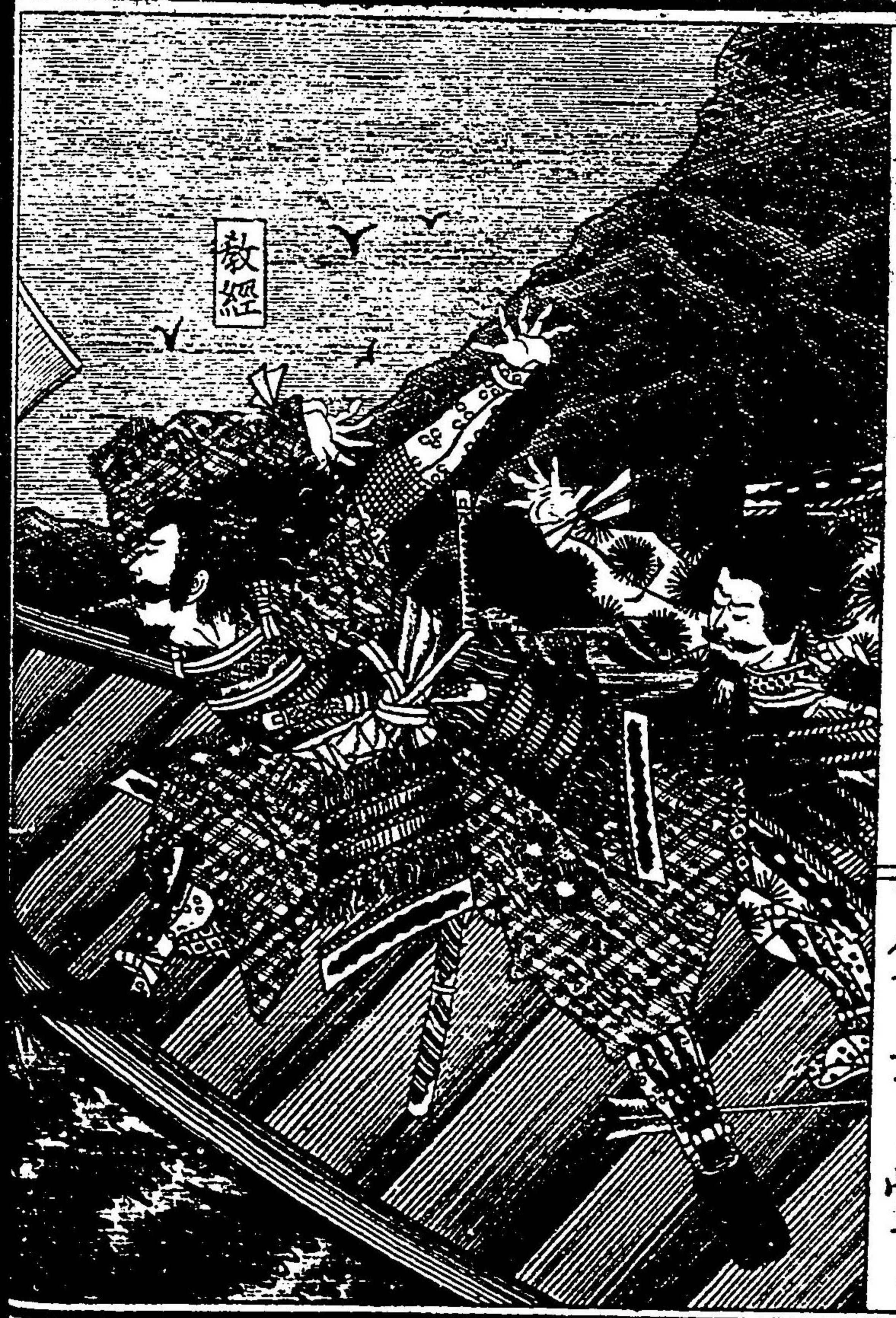
平家の残黨安徳
帝と御座船不移
て滄々たる海上は漂ふ
源義經之を襲ふ
自ら乗り込みけ
るを官女ら驚き帝
を抱き水底に
沈みしとを



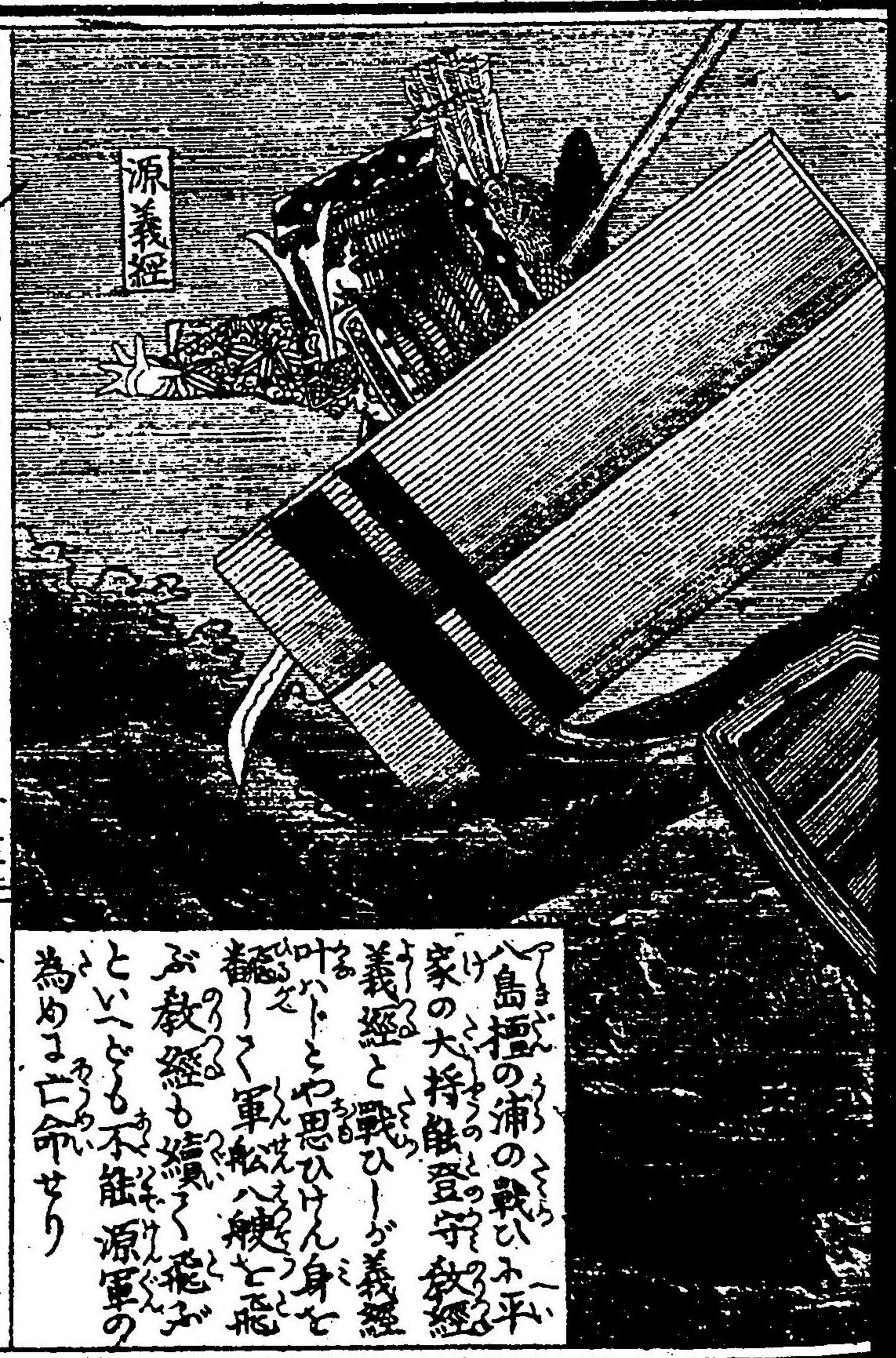
義經

十二十二

金華



教経



源義経

島根の浦の戦ひは平家の大將源義経と源義経と戦ひしが源義経は思ひけん身を翻して軍船へ飛ぶと飛ぶ教経も續て飛ぶといふも不能源軍の爲めは亡命せり

義経平家退討の効ふ
 より伊豫守に任
 都の守護として堀川
 の御所を賜ふと兄頼
 朝ふ告げざりしに
 梶原景時とて佐坊
 昌俊と討手として夜
 討とけり

義経

十四

源義経



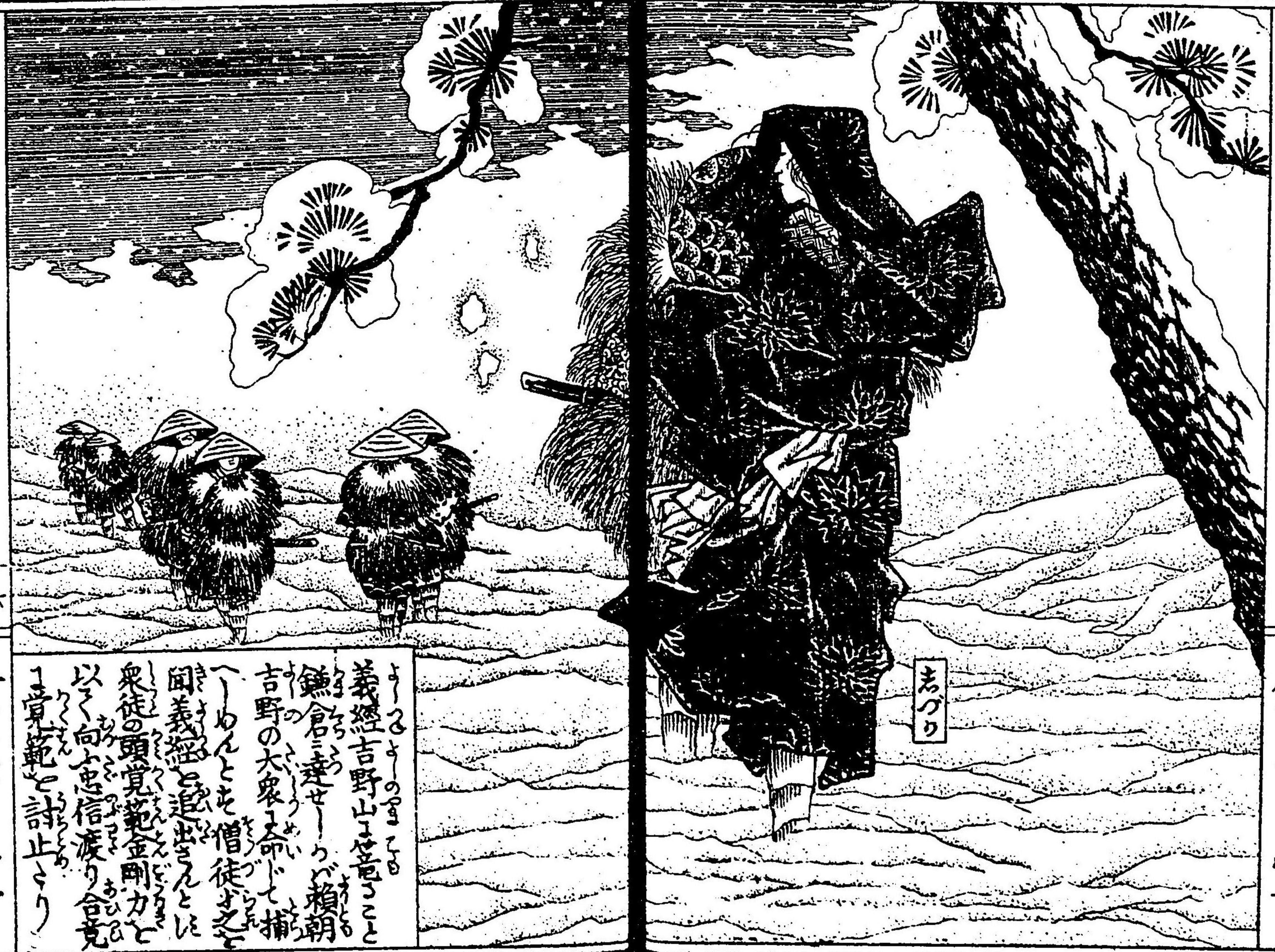
義経

源義経



義経堀川殿と立退き任
國伊豫に赴むんとし七
大物の浦より船出せしは
海上暴風激浪の中平
家一門の灵現をれいふ
弁慶法力を以て退け
しとも船は住吉浦に
吹戻されたり





まつり

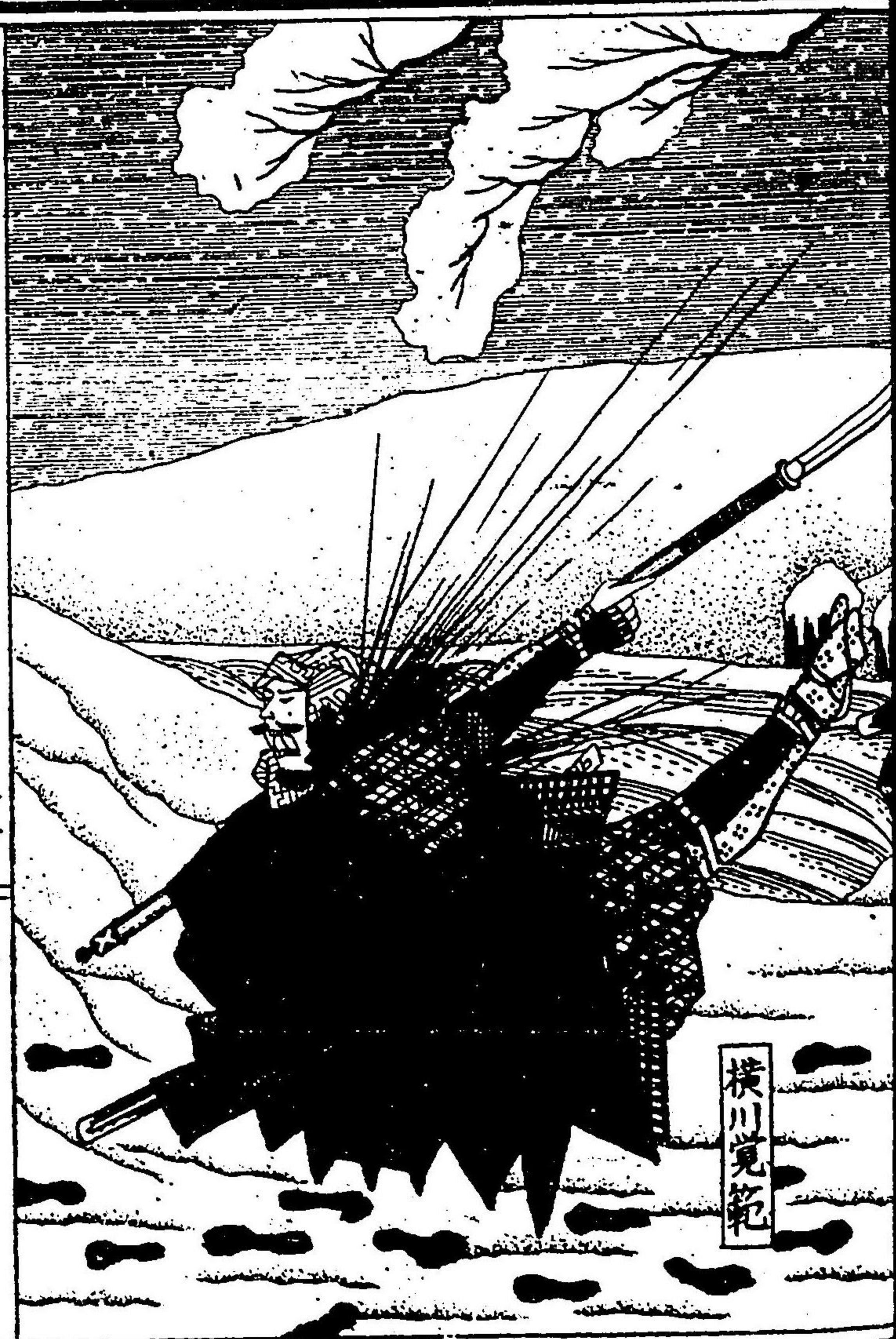
義經吉野山を管すること
 鎌倉に達せり頼朝
 吉野の大衆を命じて捕
 へりんとて僧徒を之と
 同義經と進出さんとに
 衆徒の頭覚範金剛かと
 以て向ふ忠信渡り合見
 一覺範と討止たり

十六



忠信

暴風怒濤の爲に義
 経住所へ行くと途に
 山に入りて大和國吉野
 山に入りて當時白拍子
 静と愛之女とせしも
 無倉の討手を恐れ
 後會と爲し
 涙と共袂を別つ



横川覚範



源義經

義經行く所とて趣
 いふ所なきまじりみ
 けしと奈良の法師お
 鎌倉の命ふ違ひと再
 三討手に向ふといと
 も一度も勝と
 能うは終に討
 手を止むれといと



義経既み兄頼朝の憎
 三を受け竊に奥州へ下
 りんとせしるゝ一臨みそ
 れとあり殿中の酒宴
 を設けし別れを告
 ぐ愛静其意中
 七事の自ら立て舞
 舞情想必へ

十九

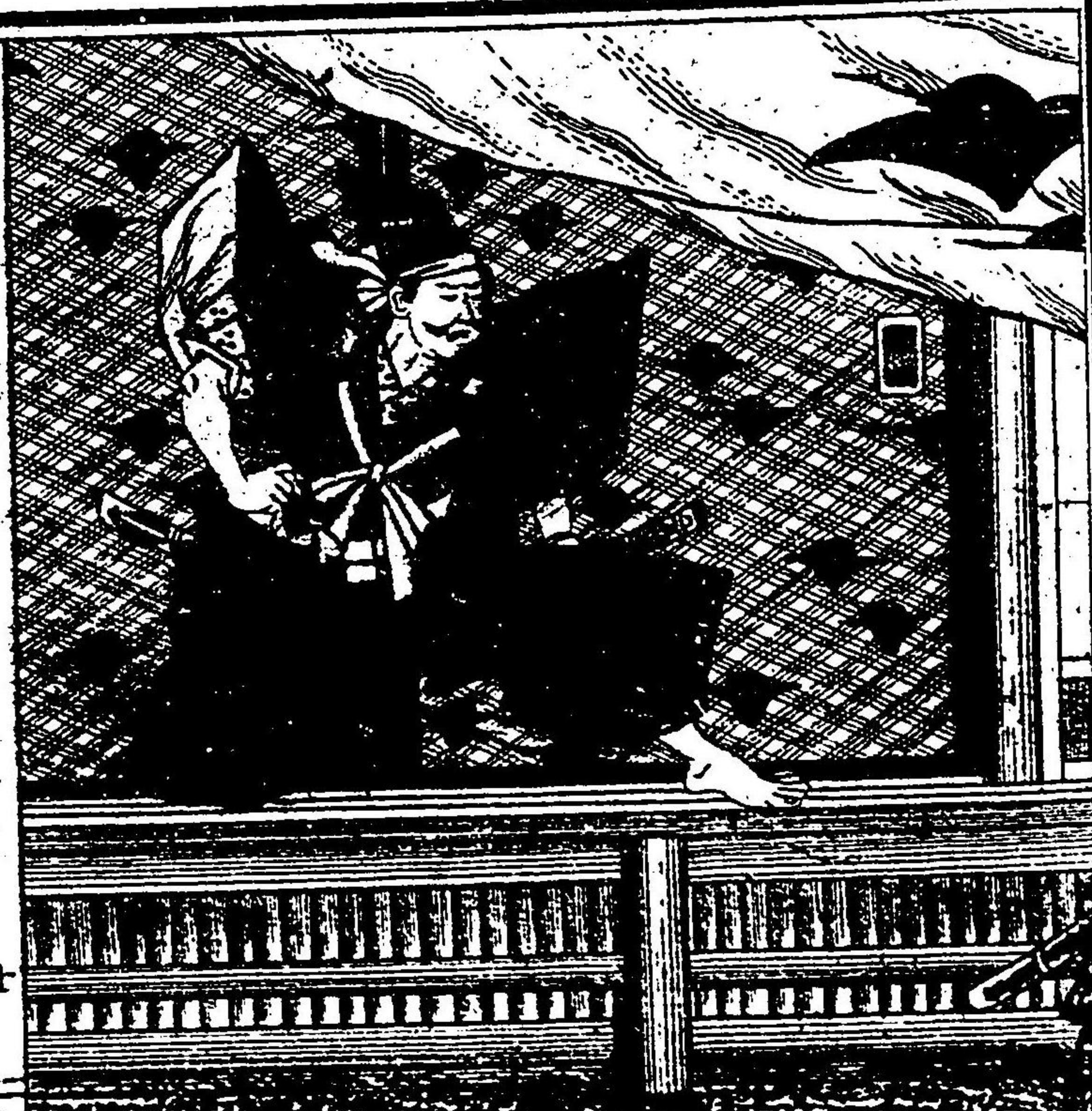


白拍子静

源義経

義経

白拍子静

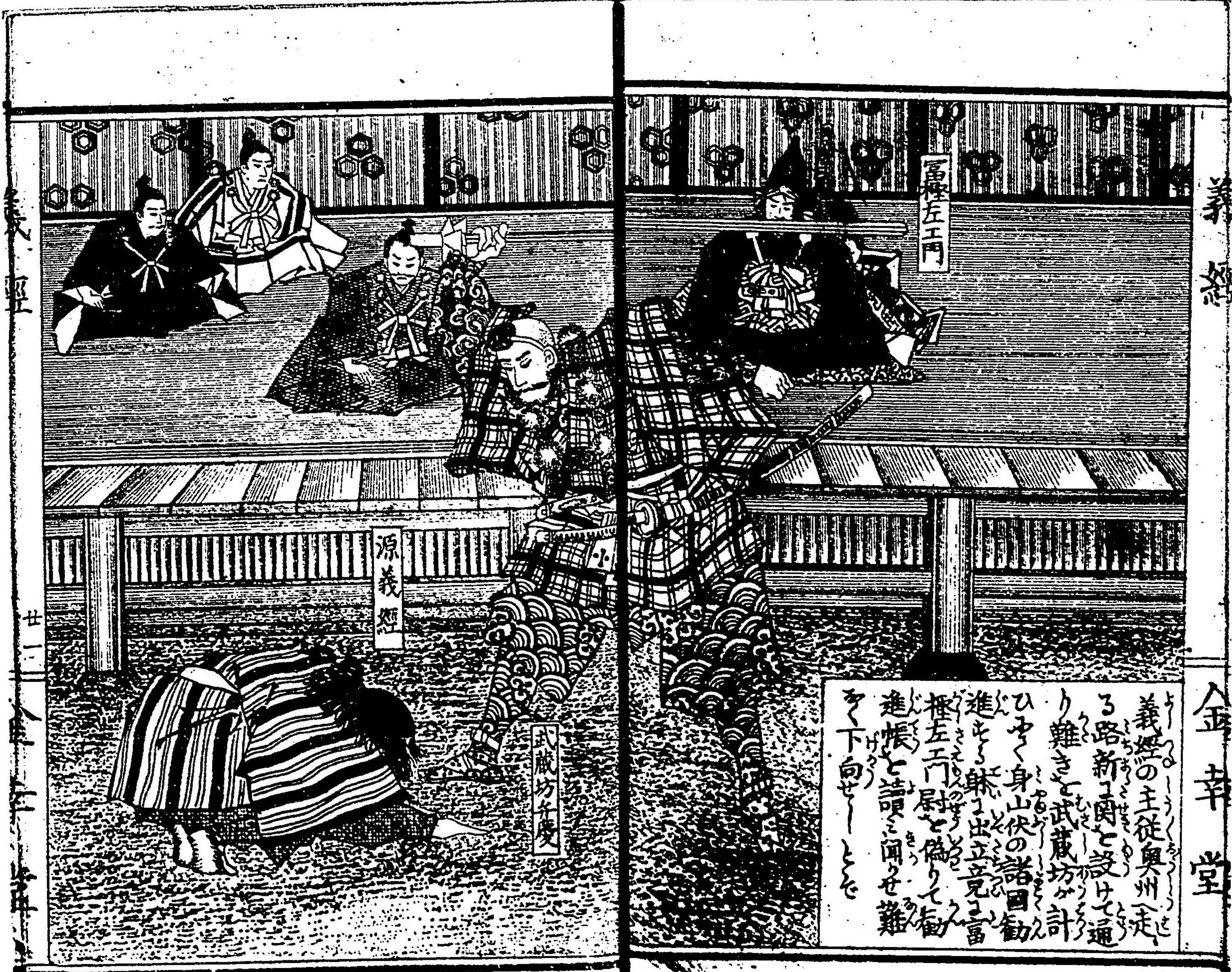


鎌倉より義経奥州
 下向きも聞き新開
 と構へて其調へと嚴
 しむる義経主従山
 伏の容貌をわし辨
 慶大先達とありて
 関守ととありあん
 ちく通行せ



義経

金幸堂



義經の主従奥州へ走
 る路新二角と設けて通
 り難きと武蔵坊が計
 ひやく身山伏の諸國勸
 進を頼み出立竟る富
 樫左五門尉と偽りて勸
 進帳と詰問の聞せ難
 き下向せりとて

源義朝

金幸堂

源義朝

源義朝

武藏坊弁慶

源義朝

廿一



義經

廿二

金草堂

義經主従芳野
 の山奥に潜居し
 と悪僧共搦捕
 らんとせしと忠信
 の甲冑を請え
 終つ味方と共
 りとを



源義經

義經

金草堂

義経奥州へ下向の途
中北の方も同く山伏
の立しるす其中ま
りしが折しも懐怡の
ころ安宅の関を越
後瓶割山ふく俄
産のけつき玉ひ安産
ありとを



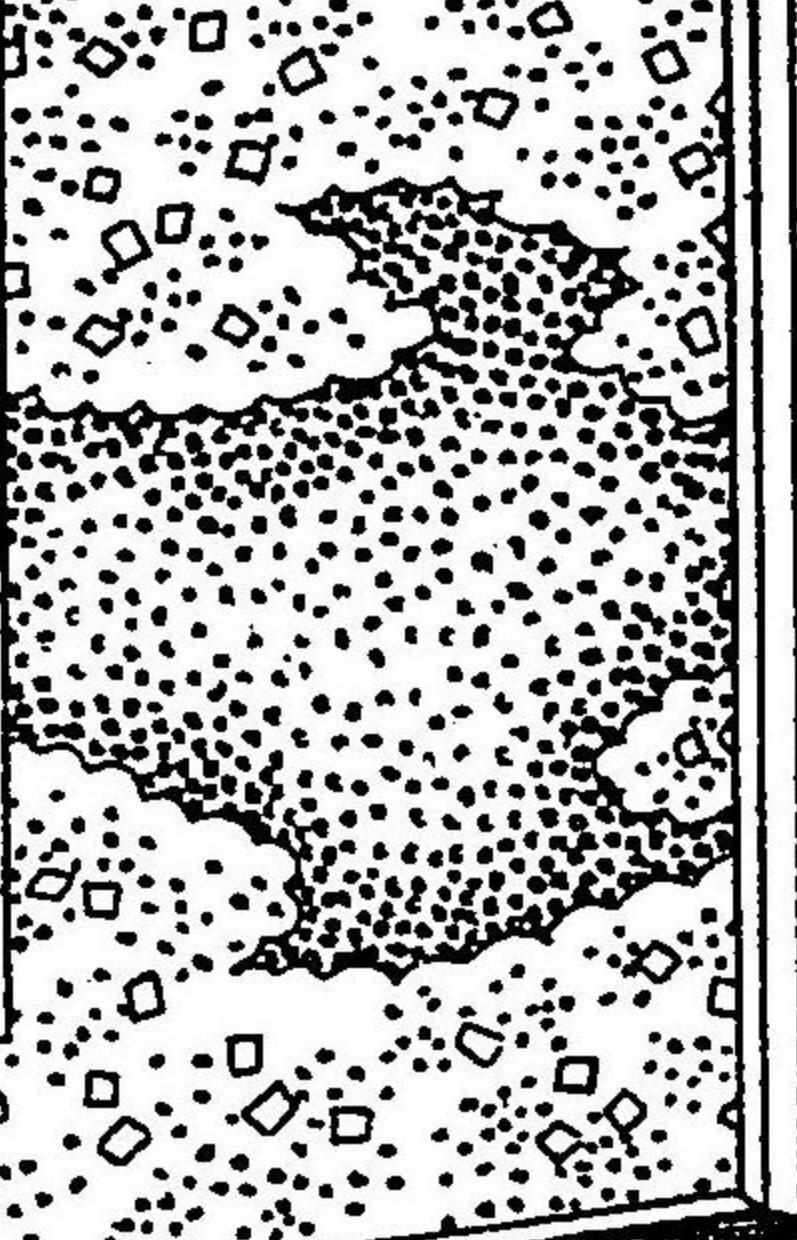
弁慶



源義経

北の方

先ん辛万苦して奥州へ
 下向し再び秀衡を見
 後來の目途を定めん
 とし程みく秀衡
 死し其子叛逆の意
 あらたかりて再び蝦
 夷地へ落しきまふと
 いふ



夏 上

廿 日

源義経



夏 上

秀衡

新刊

明治十七年八月三十日御届
同 年九月 出版

定價拾五錢



編輯人

町田 瀧司



本所區表町三拾壹番地

金幸堂

出版人

稻垣 良助



日本橋區米次町三町目壹番地

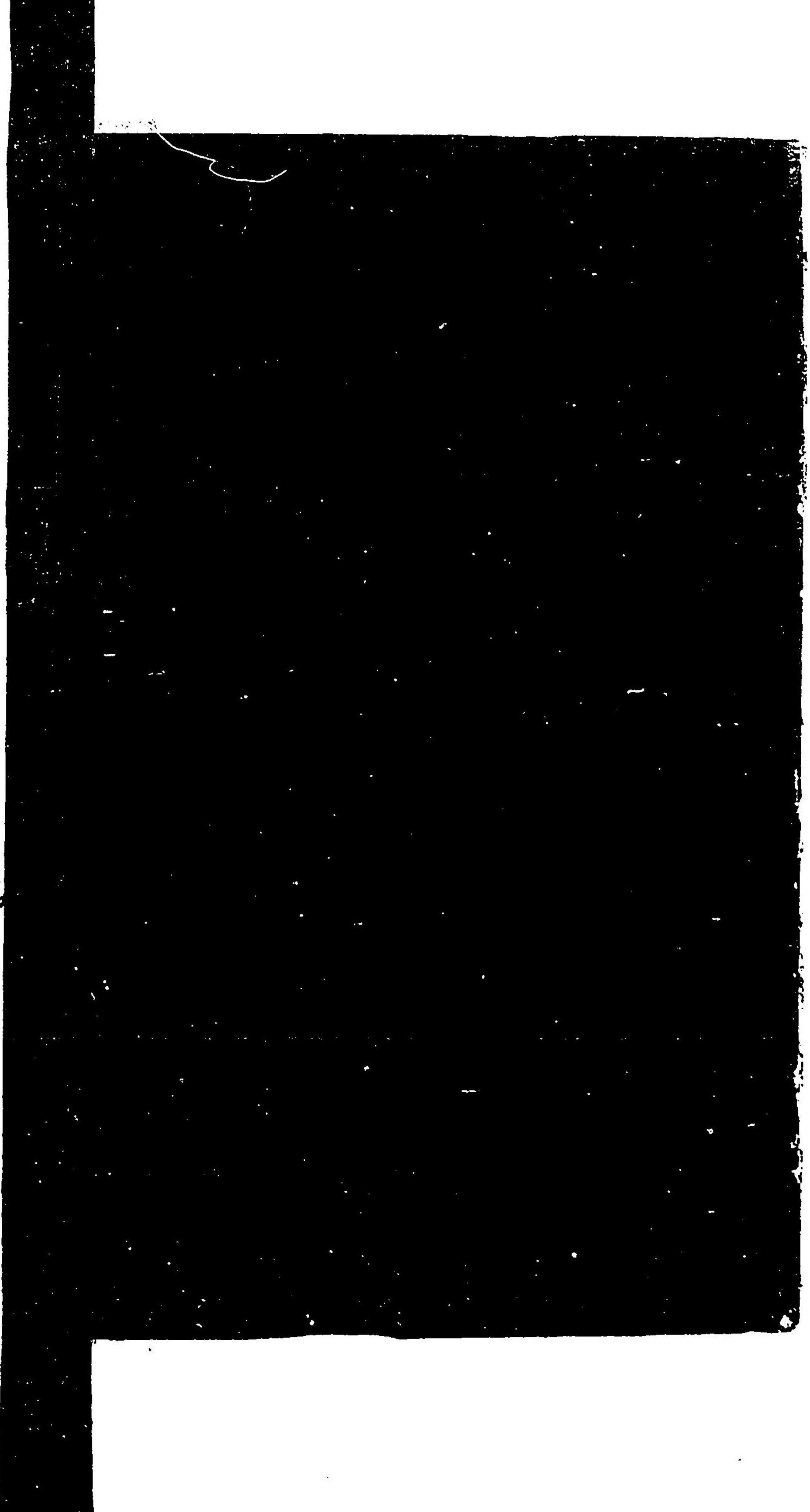
金榮堂

發兌人

牧野 惣次郎



日本橋區橋町三町目拾壹番地



義經一代記

特60

382

092712-000-6

特60-382

義經一代記

町田 滝司/編

M17

DBP-2495

